

表現活動が導く美術的思考力

～中学・高校生が見つめる、「家族」「病」「命」「平和」～

沖縄県立浦添工業高等学校

教諭 金城 満

1 研究の概要

この研究は5例の実践を通して、根底に流れている共通のテーマを抽出し検証する試みである。実践例は筆者の美術教師としての発見や思考を中学校勤務時の事例と、高校転勤後の事例の、連続性のある5例である。いずれも中学・高校生に美術を学校教育の教科の一つとしての範囲だけで捉えさせるのではなく、生涯を通して自己や社会を見つめ、表現するための手段と位置づけて実践を行った。表現を介在させる事で促される美術的思考力により、はじめて見えてくるもの、感じるもの、聞こえるものを「家族」「病」「命」「平和」をキーワードに研究した。

2 5例の実践から

2-1「家族の肖像」

(平成3年～平成6年・1991～1994)

那覇市内の二校の中学校美術で行った絵画制作と作文を組み合わせた実践である。当時、学習指導要領改訂の動きの中で授業時数の削減もあり、少ない時間の中で効率的に授業を実施し、展開していく教材開発が必要であった。しかし、授業の効率化だけでは、試行錯誤から生まれる創造性を奪ってしまう危険がある。生徒が自分と向き合い制作出来る時間の確保と、それにあった教材開発をすべきである。しかし、その様な中、安易にセットものの教材の導入から、画一的な作品が出来てしまう授業を目撃した。そして評価が済み作品返却後、大量に作品が放置されている嘆かわしい状態に疑問を持った。その原因はもちろん生徒だけにあるのではなく、教材そのものに魅力が無いからだ。様々な「セットもの」に慣らされた現代、どこでどのように作られているのかに、疑問も持たず、ただ便利との理由から消費している。美術は創造であるべきで消費ではないはずである。その様な授業からは、テーマや物とのかかわりによ

る思考や工夫は育ち難く、画一的な作品が多くなるのは容易に推測できる。

美術という教科の役割は何なのか、家へ作品を持ち帰らせて大切にさせたい。中学3年にもなれば、現在の自分自身の状況を分析でき、問題意識も持っている。思春期の揺れ動く時期の作品として残させたい。そのためには、生徒自身と直接関わりのあるものでなければ実感が乏しく、作品に対し愛情が持てないだろう。それが作品を放置する大きな原因ではと考えた。そこでテーマにしたのが「家族」で、家族写真をもとに制作する課題である。生徒達にとって家族写真を学校に持ってくることへの違和感や、抵抗感もあるだろうから、家族全体でなく家族と自分の関係が息づいている写真であれば何でもよい事とした。技法は中学校では見慣れない卵テンペラを用いた。授業開始時に卵と酢で接着の役目を果すメディウムを作り、絵の具の元である顔料と練って、下地を施したシナベニヤ版に、ハッチングというひたすら線を重ねていく描法で制作するというものである。自分で絵の具を作る事から、絵の具の大切さも理解できて、コストも原料の共同購入により従来の絵の具の半額程度に抑えられた。そして顔料の発色の美しさ、卵と水の性質等、制作過程での発見が思考を刺激して様々な工夫が生まれた。さらにこの技法は、耐久性もあり、作品の長期保存が可能である。したがって将来自らの中学時の作品を通して、親の立場からも家族を見つめるきっかけにもなるだろうと考えた。

また、この教材開発の特徴は、その年の文集「家族の肖像」が生み出される点と、3年目には新たに映像を加えた点である。映像は、絵の具の物質面の理解と絵画技術の向上をテーマにした「第一部テンペラのテクニック編」と、絵がもつ背景の作文朗読にBGMを重ねた「第二部ハート編」の二部構成とした。この様な映像教材を加え

ることで、感情に訴えることをねらいとした。

文集はプライバシー問題もあり、掲載の承諾は欠かせない。実名、匿名で作文の掲載に協力してくれた生徒達、持ち帰った文集に対して反応を下さったご父母の皆様にご感謝を伝えた。筆者自身この実践では、中学生の外観の空々しさからは計り知れない、内面の繊細さに凜とさせられ、教育の方法のヒントを与えられた。同時に美術教師として、生徒の成長に立ち会える喜びを実感出来たはじめての出来事であった。また実施クラスの3年の、ある学級通信には、担任自身の「父と娘」の関係が綴られており、文集の最後に掲載させていただいた。

2-2「沖縄県立中部病院壁画制作」

(平成7年・1995)

これは病院の放射線治療病棟の環境改善のための相談を受けて、沖縄県立開邦高等学校芸術科美術コース2年生の授業で取り組んだ壁画制作の実践である。

美術教育を、学校における「美術科教育」と社会教育や地域行事等と関係した「アートプロジェクト」に分けて考えてみる。前者は目標や内容に学習指導要領の規定がある。後者はボランティア等とも重なり様々な形が考えられる。この実践は両者を重ね合わせた領域だと定義して、手続きを明確にして行った。具体的には、授業部分を校長や科と調整して科目の一つである「環境デザイン」の課題として、計画から下準備を学校で取り組み、最終過程の制作を現場で行う事とした。現場への送迎は病院のバスをお願いして、制作期間は2日間と定めて実施した。

モチーフはこの病棟で小児がんのため亡くなった少女、親川智子の詩集「鳥になって」から自然をテーマに展開した。まず、壁画を施す病棟の20分の1サイズの模型を作成して、下描き案を模型に貼り、サイズや色彩、方向性等あらゆる角度から調整を重ね検討。そして決定案の実物大下図を、数枚に分割して作成して現場での制作を行った。この壁画が治療室で一人、放射線治療を受ける患者にとって、長い孤独な時間を少しでも和らげられたらとの願いの制作である。自分たちの出来る事で、多少でも社会貢献に関わられて、美術や芸術が「人を幸せにする」という目的があるこ

とを考えるきっかけになった。この事は、生徒も筆者も同様の意見であった。

2-3「石の声」

(平成8年・1996)

“ 黙々と、ただ石に番号をうつ その行為の数、20余万 祈りにも似た表現行為。”

筆者の企画による土曜、日曜日を利用して希望者を募り行った、一般参加型のアートプロジェクトである。

沖縄、普天間基地に隣接した佐喜真美術館前広場に於いて1996年6月15、16日で236,095個の石に連番を書き入れ、積み上げていくという行為が開邦高校芸術科の呼びかけで行われた。この数字は、96年当時で把握されていた沖縄戦戦没者数である。しかし、二日間で終えたのは約半分。結局翌週の22、23日まで続行。報道等様々な呼びかけで一般の参加者も増え、延べ六百人が参加。終了は23日、沖縄戦終結の日である「慰霊の日」。正午に全員で一本ずつ線香を供え、黙祷を捧げた。これらの詳細の記録保存として、2007年に著書「石の声」を出版した。

2-4「迷い鯉」

(平成9年・1997)

筆者の企画で行った、開邦高校芸術科と佐喜真美術館によるアートプロジェクトである。アートと平和教育の融合をテーマに、鯉のぼりを使ったインスタレーションの手法を取り入れた表現行為を行った。

本来、鯉のぼりは5月の大空を元気に泳ぐ。しかし、ここでの鯉のぼり「迷い鯉」は、1997年の沖縄県民の自己決定出来ない、また自己決定を許されない、右往左往した状況をテーマにした。また、色彩は軍事色である迷彩色とした。その色をもった鯉は何処へ行けばいいのだろう。アートを切り口にして様々な問題を考え、自ら行動を起こせる平和な環境とは何かを生徒達に投げ掛けた。インスタレーションが視覚的または具体的に人々に及ぼす影響や、社会に与える影響をこのアートプロジェクトの核とした。

2-5「鉄の記憶」

(平成11年～平成12年・1999～2000)

1996年の「石の声」の趣旨を発展させて行ったアートプロジェクトである。普及が進み始めたインターネットを利用して、その趣旨や状況をその都度発信、県内外へも参加を呼びかけて、全国的な参加型のプロジェクトを試みた。進捗状況を発信するスタイルから公開進行型とも呼ぶ事が出来る。この様に、参加型または公開進行型の波及効果を取り込むことで、新たな平和教育としての可能性も拡がると考えた。その呼びかけ文は以下の通りである。“木片に釘を、ひたすら打ち込んでいく表現行為。それを「鉄の記憶」と呼ぶ。

沖縄戦では、その激しさを「鉄の暴風」と形容するように、日米あわせ20万tもの砲弾・爆弾等が使用されたといわれる。この量は沖縄戦戦没者23万余から考えると、人ひとりを1tの「鉄」で殺害したことになる。またその5%の1万tが不発弾として残され、戦後様々な不発弾事故が起きてきた。今日まで不発弾対策は進められてきたが、未だ3千tが地中に眠っているとみられている。ここでは砲弾・爆弾等と釘とを対応させ、「暴力としての鉄」をテーマにする。あえて、1本数gの釘を打ち込むことで、行為の本質を考え、人間の中に「眠っているもの」を確認するというものである。また同様に、戦後の課題として残された平和資料館問題、基地移設問題等も、多角的に見据えていく機会として、この表現行為を行う。”

方法は、木片、間伐材、台風で折れた枝等に、種類やサイズを問わない「膨大な物量」と捉えた釘をハンマーで打ち込む。衝撃が手に「ズシン、ガツン」と直接伝わる行為を繰り返す。その時間と感触から「加害と被害」の本質を考える。開始から1年後、集約された「鉄の記憶」は、参加者、数量、地域等のデータの記録を添え校内展示を行った。その後木片は、自らに潜む暴力性を自認し葬り去る意図で火葬した。焼き残った「釘と灰」は記録とともに、「加害の痕跡」として佐喜眞美術館に常設展示、収蔵された。

3 まとめ

「石の声」「迷い鯉」「鉄の記憶」の3つのプロジェクトは、美術教育から発展した平和教育の側面を持つと言えるだろう。アートの持つ力の潜

在力が沖縄特有の歴史や戦後処理問題等、様々な要素を呑み込みながら拡大し、結果的に両者の境界面に平和教育という形が出現した。さらに沖縄に今もなお継続している基地問題という構造的な暴力に対して、生徒に比喩的に分かり易く、その構造を主体的に学ばせることは沖縄の将来にとって重要である。なぜならば、2013年現在、沖縄戦体験者は高齢化が進み県民の17%にまで減少している。例えば、体験者の語り部による活動、沖縄戦の記録映像を収集保管した1フィート運動事務所など、相次いで縮小の動きがある。これらの例からも平和教育の継承と、主体的に学べる新たな教育プログラムの開発が急務である。筆者はこれら3つの実践から、美術科教育とアートプロジェクトの融合は、それぞれが持つ力の波及効果をベースにした平和教育が、今後必要だと考えている。また、このプロセスは個別の事象の理解と、全体を統合して表現する力が必要な事から、環境教育に対するプログラムの構築にも有効だと考え、今後の重要なテーマとして取り組んでいきたい。

さて先述の「家族の肖像」や「沖縄県立中部病院壁画制作」にも言える事だが、以上の実践は、企画開始時から明確な形が見えていたわけでは無い。表現せざるを得ない衝動が、身体の違和感とともに沸き上がった時に形となったのである。思春期という心身の違和感、病という不安や痛みが追いかける違和感、暴力や差別への違和感、それらの違和感の実態を、表現している自分自身が出現させて目前に見たいという衝動である。そのために、生徒達は「家族」という基本単位に黙々と自己との対話を重ねて線を引き、「壁」に病や命を感じ、「石」に数字を書き入れ、「鉄」に他者や社会、そして平和な環境とは何かを考え続けた。これらのことから筆者は「美術科教育」と「アートプロジェクト」の有り様が、境界線から境界面に変化して接近していると感じている。そして生徒の美術的思考力の育成のためにも、あらゆる分野を取り込んだ、魅力的な教材開発をする必要があると考えている。

※上記実践写真映像資料等
webサイト「金城満の仕事」

(<http://mkmk.p2.bindsite.jp/mk/cn42/pg346.html>) 参照